

自然と共生することの楽しさ

The Excitement of Living in Harmony with Nature

政金 裕太 Yuta MASAKANE

株式会社グリーン・ワイズ
Green Wise Co., Ltd.



2021年10月15日、雑誌The Nation にとあるインタビュー記事が掲載された。“Why Ecology Is the Infrastructure Of the Future”と題されたその記事は私が尊敬するランドスケープアーキテクト、Kate Orff 氏の危機迫る提言だった。彼女は本文の中で、「(気候危機の中で) 真の意味で生態系(Ecosystem)を私たちの都市に届けこませ回復させなければいけない。このことは次の100年を生きる私たちにとって、気候変動のリスクを減らし、どのように人と自然と社会が共生していけるのかを考えることになる。生態系は次の世紀のインフラとして捉えるべきだ」と述べている。人と自然の共生のために生態系をインフラとして捉える。そしてその概念を実装し、価値観を共有していくこと。これがこれからのランドスケープアーキテクトに求められることの一つかもしれない。

きっかけ

大学入学直前に東日本大震災が起き、学部生活を通して「災害」や「まち」について考える機会が多かった。そんな中で「ランドスケープアーキテクト」という職業を知った私は、災害の多いこの国で自然と人間がうまく共生していける空間をつくっていくランドスケープアーキテクトという分野に憧れ、留学を決意した。留学先は米国南部のルイジアナ州を選んだ。2005年に米国史上最大級の災害、ハリケーンカトリーナに見舞われた地域だ。そんな都市だからこそ、災害に対する問題意識が強い。そこに身を置いて学ぶことで、レジリエンスで持続可能なランドスケープをつくっていくことのヒントを得られる気がした。実際に米国にいた4年間で、この興味に触れる様々なプロジェクトに関わることができた。

地域を救う公園

大学院2年目の秋、当時の担当教授は、課題対象地のみならず、非営利団体の活動現場や小学校でのミニレクチャなど様々な主体が関わる場所へ私たちを連れて行ってくれた。そのうちのひとつが、サイプレスの植樹ボランティアで訪れた、ルイジアナ州ニューオリンズのSankofa Wetland Parkである。この公園は、カトリーナの被害を最も受けたニューオリンズ東部のLower 9th Ward 地区にある。そこで活動する地元住

民は、自分たちが洪水の起こりやすい低い土地に住んでいることを十分に知っている。それを理解した上で、地域に湿地の雨水貯留効果を活かした公園を整備していた。入り口には、雨天時に50,000ガロンの雨水を貯留できることが記された看板が設置され、公園がレクリエーションだけではなく治水機能的にも地域に貢献していることが明示されていた。また、園内の池は隣り合う川や湿地帯と繋がっており、赤ちゃんアリゲーターがやってきたり、ウサギが現れたり、水鳥が餌場にしていたり、生物にとっても豊かな場所であることがわかった。このプロジェクトでは、生態系循環の中で形成される湿地というランドスケープを地域の治水インフラとして考え、公園として市民に楽しんでもらうように整備している。生態系の持つ多様な機能を活用したグリーンインフラの好例だと思う。また、公園づくりのほとんどがボランティアや職業訓練プログラムの一環で行われ、地元市民が主体となり地域に根ざした場になっている。地元コミュニティが自分たちの地域を理解して生態系がインフラとして重要であると捉えてつくられたこの公園は、次の100年間も地域を守り残されていく市民の想いがつまった公園だ。

月から来たフラミンゴ

もうひとつ印象深いプロジェクトは、ポルトガルのタピラという小さな海辺のまちを対象にしたものだ。タピラは歴史的な城下町と美しいビーチをもつ観光地という一面もあったが、最も特徴的なのは、まちの大半の面積を占める塩田風景だ。かつては塩産業が栄えていたが、全盛期の面影はなくなり、塩田だった場所にホテルを開発するという声も聞こえていた。その一方で、産業遺産としても生態系の一部としても貴重である塩田を保全していく動きもあった。実際に、塩田内を歩いてみると、生産を続けている人もいれば、その独特な風景を見物する人もいた。バードウォッチングをしている人がいたのも印象的だった。タピラでは海から陸にかけて順番に、海岸、砂丘(砂浜)、塩性湿地、塩田、市街地、山といったランドスケープの連続が見られる。調べると、同じ塩性の水辺でも、海、湿地、塩田それぞれで見られる鳥の種類が違うことがわかった。塩分濃度が変わることによってそこに住む微生物や魚類の種が変わり、それを捕食する鳥の種類も変わるとい

うメカニズムだ。この短い距離の中に多様なランドスケープが生まれ、多様な鳥を呼び、その鳥たちを当てにするウォッチャーたちを呼んでいるのだ。私はここで初めて、野生のフラミンゴの群れを見た。

塩田の仕組みに目を向けると、興味深い工夫がされていた。塩の精製には様々な方法があると思うが、タビラでは、入浜式塩田と言う手法がとられていた。深さの違う数種類の塩田に水門や溝を設け、潮の満ち引きを利用して海水を引き揚げる。内陸へ進むにつれて、段々と塩田は浅くなり、一番浅くなったところで海水は蒸発し塩の結晶が生まれる。最後は農家の手によって結晶化した塩が集められ工場へ運ばれる。水門は石組と木板でできていたり、農家の作業は重機ではなく手作業が主であったり、素朴でありながらもそこには自然と文化の調和した風景があった。

私は、この一連のダイナミクス（月の引力による潮の満ち引きがもたらす、塩田の文化的な風景とフラミンゴを代表とする生物多様性）に感動し、設計課題のタイトルを「月から来たフラミンゴ」と題して発表した。人間のコントロールが及ばない宇宙の動きと人間が造った小さな土木的工夫のコラボレーションによって生まれるタビラの風景には、まさに自然と人間の共生が映し出されていた。

政策づくりからどんぐり拾いまで

卒業後は、テキサス州のヒューストンに移り設計事務所で働いた。ヒューストンも湿地の上につくられたまちであり、2017年にハリケーンハービーの被害を受けたことは記憶にも新しい。私のいた事務所では、ハービー以降、レジリエンスなまちをどうつくっていくのかという課題に対して、市と協働で提言を作成していた。“Houston Incentives for Green Development”というその提言書の中で、特に重要な4項目とされていたのが以下である。

- ① Integrated Green Stormwater Infrastructure Development Rules
- ② Property Tax Abatements
- ③ Award and Recognition Program
- ④ Increased Permitting Process Certainly and Speed

グリーンインフラのルールを明確にし、実装しているプロジェクトに対して優遇措置をとる。また、プロジェクトを周知させるために表彰していく。これらを正確に迅速に認可していく。このようにして政策者や計画者の立場になって、生態系をインフラとして考えるためのルールづくりを一緒に考えるのもランドスケープアーキテクトの面白いところの一つだ。実際

に当時動き始めたプロジェクトとして、宅地開発された氾濫原の地域を危険地域と判断し、市による立ち退きをして公園にするプロジェクトがあった。急速に変化する気候変動の問題に適応するには、このような自治体や国による大規模で大胆な政策が必要であろう。

日本に帰国後は環境共生を目指す会社で設計の仕事をしている。とあるプロジェクトでは、計画地の周辺に残る里山の自生種を遺伝子レベルで継承するために、ステーキホルダーとともにどんぐりを拾い、育った苗木を敷地内に植樹するワークショップが計画された。生物目線での持続可能な環境を保全するだけでなく、利用者目線でも植樹した樹木に愛着を持ってもらうことで持続可能な活動を促進している。些細なことでも周辺の環境の変化や四季の移ろいに目を向けてもらうことが、持続可能な共生社会への第一歩なのかもしれない。サステイナブルな活動を支援する設計と、実際に使う人がその場所へどう関わるかを想像し提案していくこと、これも私たちの重要な役割の一つだ。

自然は楽しい

「インフラ」と言うと生活を支えるハードな基盤という印象があるかもしれないが、Kateの言うインフラは、宇沢弘文の言葉を借りるなら自然環境も含む「社会的共通資本」に近いと私は考える。さらに私は、生態系がもたらす恩恵として気候変動への適応に加え、環境や生態系との共生は「楽しい」ということも含めたい。環境と共生していくことは決して我慢を強いられることではないと思う。ニューオーリンズの事例でも湿地を生かしたことで、洪水緩和機能とレクリエーションや環境教育の機会が生まれている。タビラの事例では、生態系を生かした文化的な生活によって、産業と生物多様性、そして鳥を楽しむ機会が生まれている。自然との関わり方を提案することや、四季の移ろいが美しいと思う感覚、これらも「自然は楽しい」と思えることにつながる。自然環境・生態系を社会的に重要な共通資本（インフラ）として捉えることで、Kateの言う気候危機への適応を越えた、真に自然と人が共生できる楽しい社会が来ると信じて、目指していきたい。

（略歴）

神奈川県横浜市出身。青山学院大学総合文化政策学科卒業。ルイジアナ州立大学ランドスケープアーキテクチャ学科修了。テキサス州ヒューストンの設計事務所 Asakura Robinson を経て、2020年より現職。